

トランプ政権は「3つのG」によって支えられているとしばしば言われます。金融資本のゴールドマン・サックスのG、百万長者の上を行く億万・兆万長者、ギャジリオネアのG、そしてペンタゴンの将軍たち、ジェネラルズのGです。軍産複合体政権ですから、軍事力を誇示し、危機をあり立てながら、兵器を売り込むという武器外交を全世界で展開してきたのは、先に触れたとおりです。

しかしこれが一段落した段階で、トランプ自身は米朝和解を米中協調路線の下でとり出したということではないかと見ています。

18年の6、7月の段階で、トランプは何を目的に米朝和解を進めているのかという質問に対して、私はこう答えていました。それは自身のノーベル平和賞狙いではないかと、と。中間選挙に勝つためのさまざまな政治戦略展開の一環ではないかということです。

今回受賞は逸したけれど、まだその可能性は残っている。しかしトランプが中間選挙に向けて何より誇示しなかったのは、彼の「外交の巧みさ」でしょう。ナシヨナリズムをありながら、強い外交、強いディール(取引)を打ち出す。その路線上に今度は米中経済戦争を仕掛ける。それがトランプの方針です。

その結果は見え始めました。中間選挙の結果は、いろいろ論評はあるけれども、私は率直に言ってトランプ外交の勝利の表れだと思

います。同時にその裏面として、民主党左派の台頭が見えてきた。従来のオバマ・ヒラリー路線でない。社民主義者サンダースやグラスルーツ(草の根)の動きが見え始めたのではないか。

にもかかわらず、衰退する米国経済への白人中間層の不満を排外主義の方へとあおり立てていくトランプ流が根強い支持を集めている。だから、中間選挙は共和党、民主党、半分半分の勝利と言えるでしょう。

米朝和解の展望は、これまでお話ししてきた大きな枠組み、すなわちバックス・アメリカーナの終えんとバックス・アジアーナの台頭、多極化世界への途上にある世界という構図の中に位置付けられます。新しい国際秩序の波が朝鮮半島に波及する中で、南北統一を志向する健全なナシヨナリズムが勃興している。このことが南北・米朝の和解の動きを支えていると見ることもできると思います。

世界で取り残される日本外交

——世界は、この間に大きく大きな変化の中にあるようです。では、日本外交は変わりゆく世界にどう臨めばいいのでしょうか。

進藤 日本の世界論は、いわば右から左まで、2つの命題に縛られています。

第1に、拉致問題解決第一主義。「拉致問題の解決なしに北朝鮮問題の解決なし」ということは、結論として、拉致が解決されなければ米朝和解も日朝和解もないということになります。

第2に、「北朝鮮の非核化なしに日朝和解なし」です。しかし、CVID(完全かつ検証可能で不可逆的な非核化)の考え方は、それ自体意味を持たないと私は考えます。

CVIDを掲げてイラクのフセイン政権、リビアのカダフィ政権は崩壊させられた。しかし、これはもう意味がない。なぜかと言うと、イラクやリビアの命運を見て、北朝鮮は、核兵器をどこかに隠し持たない限り自分たちも同じ運命を辿らざるを得なくなるという、固い意志を持つているに違いないからです。だから日本は、北朝鮮は核兵器を隠し持つていてもおかしくないと、腹をくくるべきなのです。

日本にないのは、外交のイロハです。外交というのは、どこかで折り合い、相手を認めることができなければ、自分の利益を確保できないものです。求められているのは、真のディール(取り引き)なのです。

拉致問題については、むしろ日朝和解を進め、自由に行き来できるようにすることが、問題解決の前進につながります。あの小さい国ですから、国交を正常化したら、どこに誰